

辻村深月
Masayuki Tsukimura

有栖川有栖
Aoi Asakawa

鳥飼否宇
Kari Kari

早見江堂
Ema Eido

平山瑞穂
Hirosaki Mizuho

米澤穂信
Yonezawa Hiroshi

日本推理作家協会編

ミステリー傑作選

— ギ ル テ イ —
Guilty

殺意の連鎖



講談社文庫

ギルテイー
Guilty 殺意の連鎖

ミステリー傑作選

日本推理作家協会 編

講談社

ギルティー さつ い れん さ
Guilty 殺意の連鎖 ミステリー傑作選

にほんすいり さつ かきょうかい へん
日本推理作家協会 編

© Nihon Suiri Sakka Kyokai 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年4月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277779-7

目次

芹葉^{せりば}大学の夢と殺人……………

辻村^{つじむら}深月^{みづき} 5

アポロンのナイフ……………

有栖^{ありす}川^{がわ}有栖^{ありす} 77

天の狗^{いぬ}……………

鳥飼^{とりかい}否^ひ字^う 153

死ぬのは誰か……………

早見^{はやみ}江^え堂^{どう} 219

棺桶^{かんおけ}……………

平山^{ひらやま}瑞穂^{みずほ} 261

満願……………

米澤^{よねざわ}穂^ほ信^{のぶ} 315

解説

千街^{せんがい}晶^{あき}之^{ゆき} 379



講談社文庫

ギルテイー
Guilty 殺意の連鎖

ミステリー傑作選

日本推理作家協会 編

講談社

目次

芹葉^{せりば}大学の夢と殺人……………

辻村^{つじむら}深月^{みづき} 5

アポロンのナイフ……………

有栖^{ありす}川^{がわ}有栖^{ありす} 77

天^{てん}の狗^{いぬ}……………

鳥飼^{とりかい}否^ひ字^う 153

死ぬのは誰か……………

早見^{はやみ}江^え堂^{どう} 219

棺桶^{かんおけ}……………

平山^{ひらやま}瑞穂^{みずほ} 261

満願……………

米澤^{よねざわ}穂^ほ信^{のぶ} 315

解説

千^{せん}街^{がい}晶^{あき}之^{ゆき} 379

芹葉^{せりば}大学の夢と殺人

辻村^{つじむらみ}深月^{ぶき}

1980年、山梨県生まれ。千葉大学教育学部卒。2004年、『冷たい校舎の時は止まる』（講談社文庫）で第31回メフィスト賞を受賞し、デビュー。2011年に『ツナグ』（新潮社）で第32回吉川英治文学新人賞を、2012年には本作を所収した『鍵のない夢を見る』（文藝春秋）で第147回直木賞を受賞した。

指名手配中の容疑者、女性を突き落とす？

五日午前六時二十分頃、岩手県盛岡市内のラブホテルの駐車場で女性が倒れているとの通報があった。女性は群馬県高崎市の私立高校美術教師二木未玖さん（25）で、ホテルの非常階段から転落したものとみられる。二木さんは顔の骨を折るなど、意識不明の重体。通報した管理人は、現場とみられる非常階段で男女が激しく言い争う声を聞いており、また、二木さんの首には何者かに強く絞められたような跡が残っていた。一緒にいた男はそのまま逃走したとみられている。

二木さんは、先月二十五日、芹葉大学で坂下元一工学部教授（当時57）の他殺体が見つかった事件で死体遺棄容疑で指名手配中である羽根木雄大容疑者（25）の元交際相手。岩手県警は、二木さんの転落に、羽根木容疑者がかかわっている可能性もある

とみて、捜査を進めている。

二木さんは事件の前日、勤務先の高校を「気分が悪い」と早退した後、連絡がつかない状態になっていた。

1

坂下先生が殺された、と聞いた時、私はすぐに、あなたの仕業ではないかと疑った。

疑ったら、怖くて一步も身動きができなくなった。どうにか立ち上がり、台所でグラスに水を汲むと、その表面が激しく揺れた。冷たい床にまた足を折って座り込む。同居する母の心配する声に、「立ちくらみ」とだけ答えた。

大学時代の一時期、あんなにも顔を合わせ、身近だった坂下先生の死を、何故、今、他人事のように実家のテレビで見ているのか、不思議で違和感があつて、だけどそれ以上にどう事件に近づいていいかわからなくて、かつての研究室仲間に連絡を取ろうかどうか迷っているところで携帯電話が震えた。

あなただったらどうしようと、不安になった。

携帯にメールしてきたのは矢島^{やじま}さんで、私は表示された彼女の名前を見た途端、ほつとしたような、落胆したような気持ちになった。

坂下先生の遺体は、工学部研究棟にある彼の研究室から発見された。学生時代、何度も進路や卒業制作の相談で訪れたあの場所を想像したが、研究棟は私たちが卒業してから改築されたそうで、研究室も新しい場所に移っていた。

だからイメージのしようもないのだけど、先生の遺体は頭や顔面を殴られ、腹部を蹴られ、首を絞められて、先生が細長くまるめた製図表をしまうのに使っていた研究室のロッカーに押し込まれていたそうだった。

翌日になって、講義にやってこない教授を心配した学生が、教務部の職員と一緒に研究室に入って、変わり果てた彼の遺体を発見した。

ロッカーの遺体の前には、薄いカーテンを引くように模造紙が広げてかぶせてあった。

隠したかったのだろう。動かない遺体を前にどうしていいかわからなくて、少しでも何かで覆ってしまいたかったのだ。なんの意味もないのに、そうすることで、少しは状況がどうにかなると思ったのかもしれない。

わかってしまう。それが、あなたの仕業だとするならば。殺したその時そばにいた

かのように——自分がそれを手伝ったのではないかと錯覚すらしてしまいそうなほど、はつきりとイメージできる。

まさか、まさかね。言い聞かすように思うけど、あなたに電話もメールもできなかつた。

遺体の発見から数日後、あなたの名前が容疑者として報道された。あなたは一人暮らしのマンションにも実家にも戻らず、逃亡したと見られていた。

この時も、矢島さんたち研究室仲間や、当時の知り合いたちから連絡があつた。

「大丈夫？ ひよつとして、まだあの人と付き合っていたりするの？」

「羽根木くんがまだ大学にいたなんてびっくりした。どういうこと？」

付き合っていない、付き合っていない、と私は答える。

付き合っていない、いたはずがない。

彼から連絡があるかもしれない、と、私の元に警察が来た時、顔がひとりでに苦笑を浮かべてしまった。そんなはずなのに、何を言っているんだろう。

「あの人が連絡を取るなら、きっと実家の両親かお姉さんか、ともかく家族です」

答える時、自分でもびっくりするほど胸が痛んで、その唐突さに涙が出てしまいそ

うになった。

夢を聞いた、愚痴も聞いた、甘やかした。だけど、私の役割はそこまでで、あなたはきつと私のことなど、もう思い出してもいない。あなたにとつて特別なのは、あなた自身と家族だけ。私はずっと一緒にいてもノーカウントの、いてもいなくてもいい存在だった。

電話の向こうで、矢島さんから「よかった。別れてて安心したよ」と安堵した様子の声を聞かされた瞬間、首すじにざわつと鳥肌が立った。

公衆電話からの着信があつたのは、指名手配報道の三日後だった。

「未玖」

声が弱っていた。その弱さが私の耳をくすぐつて揺らした。

本当に連絡があれば困るだろうと思つていたのに、あなたに名前を呼ばれた途端、嬉しさとか懐かしさとか、こみ上げる感情が喉をつぶし、目頭を熱く溶かした。

「ごめん。最後に一度、どうしても会いたくて……」

「今、どこ」

声をひそめ、尋ねていた。

彼に会うこと以外、他のことはまるで考えなかった。どうにかなる、どうにかなる、誰かに見つかったら、警察に出頭するよう説得するつもりだったと言えればいい。彼に会って、全部、それから考えればいい。職場にどう言って休みをもらおうかということ、頭の中がいつぱいになる。

2

夢があつて、それに向けて具体的な行動を起こしていて、少しは将来に望みがありそうだという話を、私は、研究室の最初の飲み会で話していた。

大学二年生の私は夢の塊かたまりで、誰に会っても自分と自分の夢である絵とを結びつけて語ることでは存在価値を計れない子供だった。

芹葉大学工学部デザイン工学科の学生たちは、二年に進級すると同時に研究室に振り分けられる。私たち坂下研究室は男子十名、女子三名の総勢十三名だった。

雄大が声をかけてきたのは、最初の飲み会から半年近く経った頃だ。

「二木さんてさ、自分に自信があるでしょう？」

灰色がかつた穏やかな瞳に見つめられた瞬間、言葉を失った。

研究室の面々で飲む時によく使っていたその店は雑居ビルの三階にあり、屋上に出られた。決まった会話が行き交う飲み会の空気に退屈するたび、私はよくそこで一人タバコを吸っていた。

「自信？」

「プロの、絵の仕事してるって聞いたから」

確かに、私は雑誌の連載コラムに半年間だけ挿絵を描いたことがある。最初の飲み会で話した時は、皆、一様に「すごい」と飛びついたが、もう興味を失っている。今は、話してしまったことを後悔していた。

高校の同級生がたまたま出版社でバイトをするようになったコネで、頼み込んでもらった仕事だった。名の知れた女性誌に自分の絵が載ったことが嬉しく、「見せて欲しい」という社交辞令を真に受けて、研究室に雑誌を持っていた。雑誌の発行月がその時点でさえ最新号ではなく、半年近く経ったものだったことが恥ずかしい。意気揚々と自慢するあの時の自分を思い出すたび、あれぐらいでプロ気取りだった私を皆、内心では呆れて見ていたかもしれないと、猛烈な後悔に襲われる。その後は、出版社に持ち込みに行っても、サイトを立ち上げても、次の仕事の目処^{めど}はまるで立っていないかった。

屋上には、雄大と私の二人だけだった。店の名前が入った薄いタオルの洗濯物が、運動会の万国旗のように夜空の下に並んでいる。

「一度夢を叶えた人って、これから先何をするにしても明確に自分がそれを叶えるビジョンが持てるでしょ？ 俺にも夢があるから、二木さんみたいな人の話、聞いてみたいんだ」

私はタバコを持つ手を唇から離して、彼を見上げた。雄大の反応は、これまで私が大学で出会った誰とも違っていた。

「羽根木くんの夢って、何なの」

雄大がまだ半分以上残っているタバコを、無言で灰皿の縁にこすりつけた。すぐに答えられないほど、彼にとっては大事なことなのだろう。やがて、たつぷりと間合いを取った後で、彼が小声で答えた。

「医者になりたいんだ。もともとデザインは第二志望だったんだけど、入学してすぐから、医学部に入り直すことを考えるようになった。来年から、休学する」

空に、薄い色の星が散っていた。彼が、私を見つめて破顔した。

「親にもまだ言っていないんだ。初めて人に話した」

衝動は、いくつもの段階を飛び越えて私の胸をいきなり襲った。